公　　民

『公共，倫理』

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前文

令和８年度（第６回）共通テストが実施された。
評価に当たっては，15 ページに記載の８項目の観点により，総合的に検討を行った。

２　内容・範囲

第１問　『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第１問と同じ。
第２問　『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第４問と同じ。
第３問　「悪」について（源流思想・西洋近現代思想）

授業内外での先生と生徒および生徒間の会話を基本設定とし,原典などの諸資料を用いながら,「悪」について多面的・多角的に考察させる大問である。源流思想，西洋近現代思想，そして資料や会話文の読み取りと，この科目に求められる学習内容からバランスよく出題されていた。多くの受験者の学習が及ばない内容ではなく，基本的な学習内容についての深い理解を問う設問が多く，着実に学習を重ねてきた受験者が自信をもって正答できたと思われる。資料を中心とした設問でも，授業や教科書での学習内容と関連の深い資料を用いたり，表現を分かりやすくして提示したりといった工夫がみられた。全体的な難易度は標準的であり，今後の受験者に基本を重視した堅実かつ十分な学習を促す大問であった。

問１　善悪と人間の関係をめぐる思想についての設問。授業や教科書で扱う基本的な知識が定着していればおおむね正解できる標準的な難易度であった。

問２　法や規範，規律をめぐる思想についての設問。イザヤなどの預言者の行跡について知識をもつ受験者は少ないと思われ，またスーフィズムについては「世界史探究」履修者以外は学習が手薄になりがちであったと推測されるが，ジハードや全体意志といった基本用語の誤用による消去法で判断できる選択肢もあり，総合的にはやや高い難易度であった。

問３　『クリトン』を資料とし，不正に関するソクラテスの考え方を問う設問。授業では「倫理」だけでなく「公共」でも取り上げられる可能性のある内容であり，定着度が高かったと思われる。脱獄という不正の意味については明らかな誤りの選択肢を定めにくいものの，難易度としては平易であった。

問４　西洋思想における感情と道徳についての設問。ニーチェの思想に関する判別は平易だが，特に理性と情念の関係に関するヒュームの思想については教科書の記述が少なく，やや高い難易度であった。

問５　信念の不一致・態度の不一致に関する資料を読み解く設問。スティーブンソンの思想は受験者のほとんどが初めて接するものだったと思われるが，原典ではなく思想の要点をまとめた資料を提示する工夫があったため，難易度としては平易であった。受験者にとってなじみのない原典から出題する場合，表現の難解さに配慮する工夫が求められる。

問６　自己の内面をめぐる思想についての設問。六択という形式に加え，特にアウグスティヌス

とカントの思想について用語の表面的な理解だけでは正誤の判別が難しく，難易度が高かった。また，**ウ**の「たとえ義務に基づくのではなくても，義務にかなっていれば」という表現はやや分かりにくい。

問７　仏教の二つの経典を資料として,悪への向き合い方に対する考え方の違いを読み取る設問。維摩経の特徴的な考え方については初めて触れる受験者が大半であり，資料を的確に読み取る力が試された。既得知識を基に資料を読み解き，仏教思想の多様性に触れることができる良問であった。

問８　他者とのつながりに関するアーレントとヤスパースの思想についての設問。八択ではあるものの，基本的な知識が定着していれば迷わず正解できる内容であり，標準的な難易度であった。

問９　大問を通した会話文を基に，ルールによる道徳的な悪への対処についての考え方を問う設問。古典的なテーマから現代の社会生活への示唆を考察する会話文の趣旨の読み取りに加え，基礎知識の定着も合わせて総合的に考えさせる形式になっており，大問のまとめとして適した設問であった。

第４問　「理」と「情」の関係について（日本思想）

日本における「理」と「情」の関係について，生徒同士，そして先生との会話を通じて思索を深める場面設定の大問である。原典資料や絵図を用いた設問が出題されたが，知識・技能を働かせて解くことができ，難易度は適切だった。全体的に，教科書で取り上げられた用語や思想の理解を問う設問がバランスよく出題され，日常の学習の成果が発揮できる設問となっていた。文章量は適切で，出題範囲も古代から近現代までバランスが取れていた。

問１　会話文を読み,「理」と「情」の関係について森鷗外が取った立場である諦念（レジグナチオン）の理解を問う設問。福沢諭吉の立場である独立自尊との違いを，内容を踏まえて正しく理解することが求められた。

問２　２枚の絵図を見て，同じ浄土（阿弥陀）信仰の基礎を築いた源信と，それを広めた法然の違いを問う設問。やや難しいが，専修念仏・称名念仏を説いた法然に対し，源信が観想念仏を説いたことや，阿弥陀仏にすがり極楽浄土への往生を願う浄土信仰を正しく理解していれば解ける。

問３　和辻哲郎の『風土』についての理解を問う，形式に工夫のある良問。日本を含むモンスーン型の風土と，ヨーロッパの牧場型の風土の特徴をそれぞれ理解していれば解ける。

問４　赤穂事件をめぐる荻生徂徠の，義を認めつつ法をより重視する立場を選ぶ設問。荻生徂徠の思想をふまえて，資料を読み取らせる良問である。赤穂事件や忠臣蔵は高校生にとってなじみが薄くなっているが，会話文を読めば解答できる。

問５　戦後の混乱期に，人間本来の姿に立ち返り，新たな価値基準を作り上げていくことを説いた坂口安吾の『堕落論』の原典資料を正しく読み取る設問。平易な読み取りであるため，大問のテーマと関連付けた上で，人間としての在り方生き方についての見方・考え方を働かせた，識別力がある設問となることが望ましい。

第５問　科学技術の進歩と倫理的課題（心理学，現代の諸課題）

生徒たちが，科学技術の進歩が人間生活の向上をもたらすかどうか，BMI や AI の事例から考察していく構成となっている。感情のような人間的とされる要素について理解を深めたり，科学技術や国家権力から（あるいは科学技術や国家権力によって），いかに人間の尊厳を守るかについて考えさせたりする過程で，心理学の基礎的な知識やその応用力，現代的な課題に関する思考力を問う大問となっている。「公共」とも関連する事項について，最新の科学技術の動向などもふま

えて作問する工夫が見られたが，時事問題の要素が強く，小問の難易度にもばらつきがあった。現代的な課題についても，基本的な学習内容を基にしっかりと考えさせる作問を今後も求めたい。

問１　エクマンの唱える基本感情は，喜び，怒り，悲しみ，驚き，嫌悪，恐怖の６つであるという知識があれば解答できる。心理学に関する基礎的な知識の習得が求められている。

問２　感情の二要因理論について説明を付した上で，この理論を支持する実験結果を考えさせる意欲的な設問である。心拍数・呼吸数が上がるのは飲料の作用だと正確に通知されている者だけが，身体反応の変化をそう解釈するので楽しい気分は高まらない，ということを導き出す論理的思考力が問われている。しかし，実験内容がやや複雑で，受験者は「滑稽な振る舞い」は必ずしも「楽しい気分」につながらないと捉え，混乱してしまった者が多かったのではないか。心理学の古典的な実験を扱う際は，実験内容を受験者に理解しやすく提示する工夫が必要である。

問３　AI の発展にともなう課題について，人間の尊厳や，権利の保障等の観点だけでなく，社会実験やデータ活用の許容範囲等，時事問題に関する要素も取り入れて考えさせている。

問４　BMI を QOL に関連付け，科学技術と人間生活の関係を考えさせる設問となっている。正解を二つ選べばよい構成になっており，受験者も取り組みやすい。ただ，**エ**については，思考力よりも，優生思想の説明の正誤を問う知識問題となっている。

問５　二つの立場とその理由の組合せを選択させる設問となっているが，平易である。理由ではなく考え方を選択させる形式にして，立場の思想的背景を問うことで難易度を上げてもよかった。

第６問　「生態系と人間の関わり」について（環境倫理）

友人同士の会話を基に環境倫理について考えを深めていく大問である。リード文を引用し，各思想家の基礎的な知識を問う設問や，原典資料を用いた読解力を問う設問で構成されていた。現在行われている実験を題材にすることにより，受験者が環境問題に関心を持てるよう工夫されている。文章量は適切であり，全体として標準的な難易度であった。

問１　ノージックのリバタリアニズムについての基礎的な知識を問うやや平易な難易度の設問である。

問２　自然搾取の批判について４人の思想家の理解を問う設問である。誤答となる**①③**はいずれも細かい表現の相違から思想内容の理解を問うていたが，正解となる選択肢が正文と判断しやすく標準的な難易度であった。

問３　気候・気象制御技術について４つの意見のうち適切なものの組合せを問う標準的な難易度の設問である。**イ**の「Think Globally, Act Locally」という言葉への理解が不十分であるために，正誤の判断に迷った受験者がいたかもしれない。設問の文章量は多かったが，実際に問われているのは用語の知識にとどまっていた。

問４　カーソンの『沈黙の春』の原典資料を用いた設問である。選択肢の文章の構成は前半が資料読み取り，後半がカーソンの思想内容理解になっており，各選択肢の前半部分の資料読み取りだけで判断が可能であった。前半部分に正文を二つ入れるなど，読み取りだけでなく，知識の組合せによって解答できる問題作りが望ましい。

問５　水俣病を題材に自然との共生に関する会話文穴埋め形式の設問である。**ア**は前後の文脈から判断することができ，**イ・ウ**はレオポルドが自然中心主義の立場を取っていたことを理解していれば正答できる。

３　分量・程度

試験問題の分量は，大問６，総設問数 32 の構成である。試験全体の分量や文字数については，「公共」と「倫理」それぞれの問題作成方針を考慮すると適切なものであったと考える。

「公共」の問題については，大問２問，設問８問で，昨年と同様であった。基礎的・基本的な知識を問う問題から，資料の読取りや知識を用いて思考力を問う問題まで幅広く出題された。分量については適切であり，解答時間内で十分解答できたと思われる。

「倫理」の問題については，設問数 24 の中で，資料や会話文を豊富に提示して，受験者の知識だけでなく思考力も問う内容で構成されていた。その分，分量についてはやや多くなっていたが，受験者が前のページに戻って確認したり，会話文中の一人一人の発言を丹念にたどったりすることを何度もしなくても解き進められるようになっており，解答に要する時間は確保されていた。程度については，幅広い分野が出題内容として取り上げられ，総合的な難易度についても適切である。ただし，読解力や時事問題に関する知識で解けるものや，逆に設問の内容の理解自体がやや難しいものがあり，難易度にばらつきが見られた。受験者が授業や教科書で身に付けた知識を基に，思考力を発揮することで解答できることが望ましい。全体としては，資料はよく精選されており，大問の構成も工夫され，適切な分量と程度の中で，受験者の知識・技能だけでなく，思考力・判断力・表現力等を測ろうとする，意欲的な試験問題となっていた。

４　表現・形式

各設問の文章表現・用語の扱いについては，おおむね適正であった。生徒同士や，生徒と先生との会話をもとにした学習場面を基本設定とし，「公共」および「倫理」の学習内容を踏まえて，原典資料や絵図，実験などを手掛かりに各大問のテーマを探究する構成となっていた。そうした資料や図表の扱いはおおむね適切であったが，実験の条件を説明する箇所に分かりにくさもあった。

また，大問の最後には，会話文の内容を踏まえつつ，既得知識を組み合わせて解く良問もみられ，全体的に設問形式はおおむね適切であった。一方，配点については，教科書での取り扱いが大きいとは言えない心理学と現代の諸課題を中心に大問２問，32 点が充てられていた。高等学校の学習現場や，教科書の学習内容を適切に学んだ受験者に配慮した配点となることが望ましい。

５　まとめ（総括的な評価）

「公共」の問題においては，「公共」が公民科における必履修科目であることから，基礎的基本的な知識や概念を問う問題や，それらを活用して考察させる問題が出題されているが，一方で受験者には基礎的・基本的な内容が十分に身に付いていないと考えられる状況が見られた。

「倫理」は，「悪」の問題や「理」と「情」の関係など思想史上の重要なテーマ，また科学技術や環境倫理といった現代の諸課題を主題に大問が構成されていた。授業や教科書で学ぶ内容の本質的な理解を問う工夫がなされており，学習の定着度・習熟度に応じた識別力のある設問が多かった。

一方，設問の設定が過度に複雑だったり，文章量が過剰だったり，記述の表現が分かりにくかったりするために難易度が上がったと考えられる設問も一部みられ，よく学習してきた受験者でも満点に近い点は取りにくかったと思われる。資料を用いた設問はいずれも意欲的であるが，難易度にやや大きなばらつきがみられた。受験者にとってなじみのない資料を用いる場合は特に，一般的な読解力だけでなく「倫理」に固有の資質・能力を問うことができるように工夫されたい。全体の構成として，現代の諸課題に関する出題が教科書等での取り扱いに比してやや大きく感じられる。時事的な動向に目を向けさせる意義はあるものの，適正なバランスについて検討の余地がある。全体的な難易度は適切であり，古今東西の倫理的な課題を現代的な視点から考察させる設問や設定が随所にみられ，『公共，倫理』らしい問題となっていた。